

——むかしの詩がいまもピッタリくる、それが土工の哀しさか。哀しいばかりじゃないはずさ。

前の号で詩の紹介をやったのは、内幕ばなしをすれば次のようなことからでした。

その日、もう雑誌一冊分のうち、半分ぐらいは印刷できていて、ちょっとした計算ちがいがかかってきました。前の号からタイプとガリパンと両方になってますが、これはなにもタイプにする原稿が特別扱いというのではありません。早く編集長の手もとにあつまった原稿は、字数計算もきちりできるのでタイプに廻しているのです。

もちろん、編集委員会の私たち、ヤローどもにはタイプを打つなんて器用な者はいませんが、専門のタイプ印刷屋さんで、この「労働者渡世」のことならメンドー見えてやるという人がいて、そこに頼んじやうのです。創刊号からずっと、表紙や写真はそのタイプ屋さんにおまかせして、やってもらってる上に、前号からは本文もオネガイして

タイプの方が読みやすいし、ガリパンの鉄筆をにぎる編集長中原くんも大変なので、やさしいタイプ屋さんに甘えて、だんだん読みやすいページをふやしたいとも思っています。

さて、何の話をしてたのか、ずいぶんまわり道になりましたが、前の号の計算ちがいというのは、はじめてタイプに廻したため、編集長が字数とページの割りつけに馴れてなくて、原稿が足らなくなったのです。そして私に向って、不足分は二千四百字、いまずぐに書けとキツイですけどね。

そんなこといわれても、二千四百字もの原稿がどうしてすぐできましようか。一メートル角の基礎かなんかの掘り方を三分でやれといわれたのと同じことです。でも、何とかしないと白いページができてしまいうらしいので、手もとの本をたよりに、あの詩の紹介を書きました。つまり穴埋めの急な仕事で、正直にいうと気がとがめてました。

ところが雑誌ができて、買ってくれた人からのハガキやら直接の話やらを読んだり聞いたりすると、わりあいによく読まれて、面白いとか、共鳴したとか、そんなふうなのです。

それで、この号でもまたやることになりました。前の号で、いつか紹介したいと書いた「土工の詩」を三篇、並べます。

その前に、作者について、前の号より少しくわしく説明しときます。

○

作者岡本潤はいま74歳、入院中とは前に書きました。青年時代からずっと、人間の自由の拡大と確立をめざしてきたひとです。詩人として有名ですが、詩では食えないので、映画会社、出版社などにつとめました。阪東妻三郎主演の映画のシナリオなんかも書いています。

生れは埼玉県ですが、子供のころから京都に住み、青年時代大阪にもいました。母親は大阪で死にました。詩人が21歳の冬です。母親は父親と離婚していたので、詩人はそれ以来ひとりになります。しかしまもなく恋愛結婚して子供もできますが、何しろ「シユギシヤ」ですから貧乏つづきで、東京、長崎、京都など放浪的な生活をしました。そして土工もやります。

いま一つだけ、土工として働いた工事がわかっていて、それは東京赤坂の下水本管工事でした。ユンボなんかない時代だから、ツルとスコで掘ったのでしょう。その工

事には多勢の「シユギシヤ」仲間が働いていて、自由労働者の組合を作っていました。

この詩人のケンカっぱやいことは、ヤマイヌというあだ名でもわかりますが、土工時代にもやったかも知れません。土工をやっていたのは30歳より前、妻と娘が一人まだ小学校に行かないころでした。さて本題、「土工の詩」です。

○

土工の詩

1

——おおい ダンドリをしよう
誰かがそう言うともんな異議なく賛成する

——ダンドリだ
——ダンドリだ

おれ達はツルやスコをおっぼり出す
掘鑿の連中ときたら泥鼠の姿で穴ん中からとび出してくる

積板の上に腰をおろす
空の青さが初めて見るように眼にしみる
白い雲が悠々と浮んでいるのでおれ達も悠々とバットの

煙を漂わす

春だもの

柔い風が時々なまめかしい女の匂いをはこんでくる
そこで一斉に歓声があがる

現場全体がどよめく浪になる

——捧げツツ！ なんてどなる奴もいる

おれ達の祝福のしんらつに赤くならないのはよっぽどの

女だ

ニヤニヤするない 現場監督

てめえなんかの出る幕じゃねえや

春だ

とにかく春だ

しかし

春風は時に喇叭の金属音をはこんでくる

カーキ色の一隊がどったどった通る

銃身が光りサーベルが反射する

喇叭は何がために鳴らされているか

あの銃口が何をねらっているか

おれ達はよく知っているんだ

おれ達の眼は燃える

燃えたまままで凝固する

こみあげる叫びが爆裂し伝播する

——ヤアイ ヤアイ ××××××××……

2

黙々としてツルを振る男

ザラザラ声でうたいながらトロを押す男

黙ってるからって淋しがつてるんじゃない

ヨタをとばしても腹はきまってる

仕事はつらいかときかれれば

ナーニと笑うだけだ

仕事をさせる奴とさせられる奴があるという

その根本病理はいわずと知れている

だがメシを食うために土方をしているのは恥でもなければ

誇でもない

生きる当然に生き 当然に闘う

その底に潜み流れる熱と仲間への親愛

一人がオーと起ちあがるときは仕事場全体がガツと一度

に煮えくりかえる時だ

3

—— 雨の夜の話

そいつは何しろ俺たちの三倍も力がある

そいつが突然オイと云ってEと俺の手を片っぱずつギョ

ッと握りしめやがったんだ

こいつ喧嘩を売る気かなと思った

——サノ 何んだ

——まあ聞け おらあ酔って云うんじやねえぞ いつか

一べん云いてえと思つてたんだ ブチまけた上で文句

がありや喧嘩でも何でもやろうじやねえか

サノは北海道の監獄部屋をはじめ日本全国を渡り歩いた

ハエヌキの稼業人だ

——なアおい ほんと云やおら最初おめえ達が小癪にさ

わつてたんだ ろくすつば仕事も出来ねえくせしやが

つて ヤにシヤアシヤアしてやがる小僧共だと思つて

たんだ 一たい全たい俺たちの中へ何しに舞いこんで

来やがったのかと怪しんでたんだ

そこでサノの奴はまたギョッと力を入れて握った手を振

りまくった

俺は手くびがもぎれそうな気がした

——だがな だんだんつきあつてるうちにヤ自然とわか

——むずかしい理屈はわからねえが 四十三の今日まで

部屋も持たず渡り土方で稼いでくりや どいつが悪く

てどいつが正しいかってこと位はよくわからア ハッ

ハッハッハハハ……

サノは眼尻に皺をよせて哄笑した

俺たちは両手で奴の大きな手を握りかえした

それから三人とも黙つてトタン屋根をぶつたたく雨の音

に聞き入った

○

土工の詩三篇はこれで全部です。まだほかにもツルとスコの現場のことを書いた詩はありますが、1/3の番号つきは終りです。

読んでどれが気に入ったか、自分に一番ピンときたか、それはめいめいにあると思います。別に、どれがすぐれ

ていると多数決できめることではないし、読む場合によつて、ピンとくる詩が変わることもあるでしょう。それでいいのです。

たとえば「3」の詩、これは雨が降ってる夜の飯場の情景と受けとっていいと思いますが、ある種の運動をやりながら（やろうとしながら）土工稼ぎをしている二人の「シュギシヤ」に、ベテランの稼業人が話しかけてきて、ケンカでも売られるのかと思つたらそうではなく、お前らの考えもおれの考えも同じよ——と意気投合するシーンです。

作られすぎた匂いも少しありますが、いわばインテリのにわか土工である詩人と、根っからの稼業人＝労働者が、こんなふう理解し合い、手を握ることもあるのは、決してウソではありません。ここ何年かの釜ヶ崎を考えても、同じ例はいくつもあるはずです。

ただその場合、にわか土工の方が、たとえ仕事は十分にできなくても、体一杯に仕事にぶつかっていることが大切でしょう。そうでないと、いくら考へてるのは同じこととわかつていても、根っからの労働者の方に、手を握り合う感情がなかなか湧いてきません。

三篇の詩のなかで、私が好きなのは「2」に出てくる次のところだ。

だがメシを食うために土方をしているのは恥でもなければ誇でもない

生きる当然に生き 当然に闘う

恥でもなければ誇でもない——ここが特に好きです。実際には、なかなかこうきっぱりした心持になれませんが、しかしこうでありたい、あるべきだと思ひます。

土工であること、アッコであることは、どうしても何か恥かしい感じを起させて、その反動で本当はしたくもない無作法などに走るときがあります。私もずいぶんやつたものです。またその一方では、土工＝下積み生活者であることを恥から誇へ裏返しにしてしまう場合もあります。むずかしいところです。この詩人にしても、自分の書いた文句通りの心持になつていたかどうか疑問だと言つてもいいでしょう。だが、そういう疑問もふくめた上で、ここが私は好きです。

生きる当然に生き 当然に闘う——という一行もまさに生きてきます。

(紹介した詩のかなづかいなど改めた点があります)

(T)